

研究レポート

加古川市立陵北小学校 木船 和幸

1. 研究テーマ 児童の言語力を育成する小学校社会科ノート指導

～ コーネル・メソッドを活用して ～

2. 研究目的

学習指導要領の改訂に伴い、児童の言語力育成が重視されている。本研究では、授業のキーワードと要点の文章化を重視する「コーネル・メソッド」(以下、CM)を活用したノート指導を継続的に行うことによって、児童が「書き言葉」で学習内容の要点を文章化し、説明する力をつけることが可能かどうかを検証する。特に、社会科で今回行ったのは、社会科授業の問題点として、教師が知識を羅列的に教えていたこと、家庭でノートをふり返って見ても自分のまなびをふり返ることが難しかったことがある。そこで、説明的文章で各時間のまとめを書き綴っていくことで、説明と判断を原理とする社会科の知識や概念を定着しやすくすることを目的とする。

3. 「コーネル・メソッド」による社会科ノート指導

コーネル・メソッドでは、1頁を‘Cue’ (キーワードや要点をつなぐ質問等を書く) , ‘Notes’ (授業内容を書く) , ‘Summary’ (最も重要な点を見やすいように書く) という3つのゾーンに分けているそして、次のような手順でノートに書き込んでいく。

【STEP 1】

- ・その日のキーワードの個数を授業開始時に児童に告げる。→ ‘Cue’
- ・授業の課題を問いの形で設定する。→ ‘Notes’
- ・授業終了時に、キーワードの答え合わせを行う。→ ‘Cue’
- ・全てのキーワードを使い、学習課題に対する答え(説明的知識や分析的知識、判断根拠)を記入させる。→ ‘Summary’

【STEP 2】

- ・キーワード数を明示せず、授業の最後にキーワードの答え合わせをする。→ ‘Cue’

【STEP 3】

- ・‘Cue’への記入内容を限定しない。→ 児童のメタ認知を促す内容や探究の構造を書き込まれた場合には、積極的に評価する。

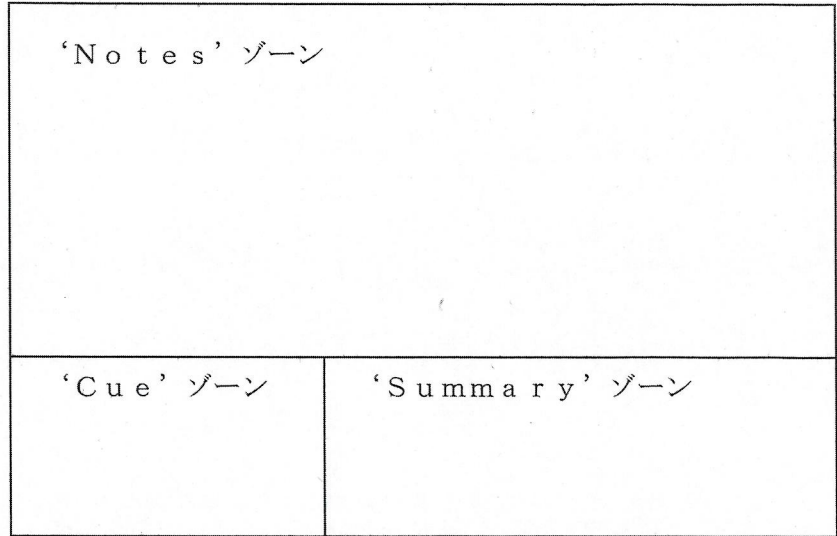
探究活動の結果習得する知識は、事象間を原因と結果の関係で結ぶ説明的知識や分析的知識である。児童がこれらの知識をきちんと習得したかどうかは、本時の目標が達成されたかどうかと関係する。‘Summary’には説明が、‘Notes’にはその過程が書き込まれる。‘Cue’には‘Notes’と‘Summary’を結ぶためのキーワード、問いや探究の構造が書き込まれる。

授業構成原理を社会の仕組みの「説明」と位置づけ、一般的なノート指導方法ではなく、社会科学習のためのノート指導方法として開発を試みた。

4. 「コーネル・メソッド」を応用した本研究の社会科ノート指導

本来のコーネル・メソッドは「縦型ノート」で行うが、本研究では「横型ノート」で実践した。それは、児童にとって黒板の形に合わせた「横型ノート」の方が、馴染みやすく、よりわかりやすいのではないかと考えたからである。

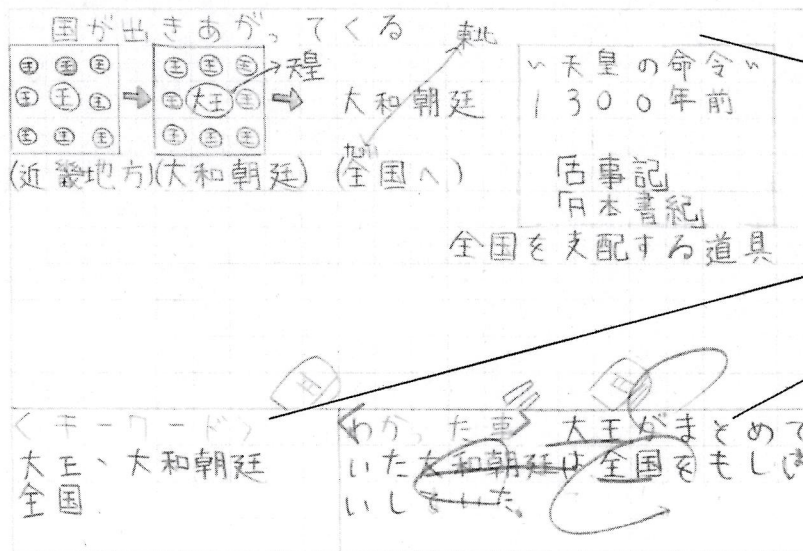
- ① ‘Notes’ ゾーンには、板書事項を記録させる。
- ② ‘Cue’ ゾーンは、③ ‘Summary’ ゾーンと共に下部に配置し、キーワードを記入させる。
- ③ ‘Summary’ ゾーンには、その時間にわかったことを説明的文章でまとめさせる。教師は、毎時間 ‘Summary’ ゾーンを中心に形成的評価を行う



ことで、点検時間の削減と点検回数の増加につながる。

5. 本研究の実際

【1学期のノート】



〈学習課題〉

- ・記入されていないが、「どのようにしていくができあがっていったのだろう」という課題。
- ・キーワードは、教師が提示。
- ・児童は、教師が提示したキーワードを使って学習をまとめた。

本研究がスタートした1学期最初の頃の女子児童Aのノートである。学習課題は、授業の冒頭で教師が言うだけで、児童はノートに記入していない。また、‘Notes’ ゾーンに書かれている量も少ない。さらに、問い（課題）が明確でないこと、説明的文章で書く訓練が積まれていないことで、‘Summary’ ゾーンに「どのようにしていくができあがっていったのだろう」に対する答えが適切に書かれていないことがわかる。

7. 研究の成果と課題

本研究の成果は以下の4点である。

- ①ノートを3分割し、それぞれのゾーンに固有の役割を持たせ、児童に学習の記録やまとめをさせることで、社会科の学習内容である説明的知識等の定着度が高まった。
- ②キーワードをもとに説明的知識をふり返って書くことで、記述的知識等を適切に活用することが可能になり、知識をセットとしてとらえることができるようになった。また、年間を通じて説明的文章を書く習慣をつけることができ、児童の言語力育成に貢献できた。
- ③ノートにキーワードの抽出ゾーンと説明的知識の文章化ゾーンを設けることで、形成的評価の視点が明確になり、ノート指導が短時間で的確に行えるようになった。
- ④また、③に付随して、教師が事前にキーワードを抽出し模範解答となる説明的文章を用意することにより（表1）、教えるべきことの要点が明確になり、指導と評価の一体化につながった。

本研究の課題の一つに、「問いの構造がわかりにくい」ことがある。今後は、補助発問のゾーンを設けるなどして、問いの構造を可視化する方向で改善を図る必要がある。また、児童に説明的文章を書く文章力をもっと効率よくつけていく方法を見つけなければならぬと感じた。1回の授業ごとにノートに添削をしたり、個別に指導したりすることを継続してきたが、1教科ではそれが可能であっても、複数教科にわたって同じ指導をすることが時間的な面からも労力的な面からも困難だからである。さらに、現場の教員が実際に使っていくやすいように改善を重ねていく必要があるだろう。

今回の実践は、社会科の授業に絞ってのことであったが、来年度より、他教科においても実践し、その成果を確かめる予定である。